

CULIB NEWS

増刊号

2024年 Vol.93.supplement

★目次★

☆結末予想部門

『想いつなが』 足ツボマツト … 2

☆自由創作部門

『これは一般職員の日記です。』 といち … 4

『インスタント』 烏庭愛 … 6

クリブニュース増刊号

本紙は、クリブニュース Vol.93 で開催されたショートショート募集企画にて、残念ながら受賞を逃した作品を一部掲載しております。しかし、その品質は決して劣るものではありません。

それぞれが力作であり、読む者の心を揺さぶります。

ぜひ、あなたの手に取り、若き作家たちの情熱に触れてみてください。

クリブニュース広報班一同

クリブニュース SS(ショートショート)募集企画

結末予想部門

2500字以内でお題を含めた物語の結末を考えることを目的とした部門です。

お題	向かい合って本を読む男女
	女性が本を片手に立ち上がる。

募集期間

2023年7月20日

～

2023年8月31日

自由創作部門

2500字以内で独自の世界観を作品にまとめることを目的とした部門です。

文字数に収まれば、何でもありの個性豊かな作品が集まりました。

①結末予想部門

タイトル：『想いつなが』

作者：足ツボマツト

②自由創作部門

タイトル：『これは一般職員の日記です。』

作者：といち

③自由創作部門

タイトル：『インスタント』

作者：烏庭愛

結末予想部門

『思いツナグ』 足ツボマツト

俺は幼馴染の京子と一緒に母校である東小学校に来ていた。俺たちは大
学を卒業して、来月には関東の会社に就職することが決まっている。だか
ら、思い出巡りの一環として故郷のいろいろな場所を回っていた。この小
学校はたくさん思い出が詰まっている、欠かせない場所の一つだ。

「全然変わってないね。私たちが卒業した時のままだ」

京子が校庭から学校を見まわしてそう呟く。京子の言う通り、校舎は俺
たちが卒業してから大きな工事は行っていないのか、記憶に残っているも
のと何ら変わりなかった。

「そうだな。あれ、あそこにいるのって中村先生じゃないか？」

「どれ？あ、そうじゃない！？おーい、中村先生ー！」

中村先生は俺たちが四年生と五年生の時の担任の先生だ。今は一度離れ
た後に教頭先生としてもう一度戻ってきているらしく、訪問の連絡を取っ
た時に対応してくれたのも中村先生だった。

「お久しぶりです、先生」

「年ぶりですね！」

「おお、二人とも久しぶりだな。元気そうで何よりだ」

担任をしていた頃の私服姿とは違って、今はスーツ姿で歳も取っているか
ら雰囲気はだいぶ変わっているけど、話し方とか笑い方は昔と何も変わっ
ていない。むしろ懐かしさを感じるくらいだ。

中村先生の案内のもと、俺たちは学校内の様々な場所を見ていった。実際に
使っていた教室に体育館、プールなどどこも思い出が詰まった場所だった。ど
うやら中村先生もそこら辺を考えて回るルートを考えていてくれたらしい。
そして、最後にやってきたのは図書室だ。なぜ、最後に図書室なのかとい
うと、ここには卒業前に書いたクラスごとの文集がまとめて置かれているから
だ。

「ほら、ここに二冊用意していたから読みなよ。その間に俺はやらなきゃいけ
ないことをやってくるから」

中村先生は忙しそうに図書室を出ていった。そんな中村先生を見送った後、
机の上に置いてある文集を手取る。パラパラとページをめくっていくと、自
分の文集のページを見つけた。何を書いたかももう覚えてなかったので詳しく
読んでみることにする。

ああ、そうだ。この頃の俺は料理人になりたかったんだっけ。今では料理な
んで全くしないことは考えないでおこう。他にも小学校⁶ 年間の振り返りや
学んだことなどが書いてあった。

文集の次は決まった質問やランキングの答えが書かれているページになっ
ていた。質問を見るたびに、そういえばそんなこと答えたなど思い出す。

その時、俺の対面で同じく文集を読んでいた京子が「あっ！」という声を上
げながら、勢い良く立ち上がった。それに驚いて。俺の体が少し跳ねる。

「急にどうしたんだよ。びっくりするだろ……」

「思い出したんだよ！ほら、ここ見て！」

京子はそう言いながら、手に持った文集のあるページを見せてくる。そのペ
ージは京子が質問に答えたページであり、指さした場所には「未来の自分へ」
というコーナーだった。

そこには「タイムカプセル忘れずに掘り返してね」と少し丸みを帯びた字で
書かれていた。

「ああ、タイムカプセルか！　そういう埋めたな。場所は確か……」

俺は必死に記憶の中を探る。そして、京子と約束した時のことを思い出した。二人でもう一度ここにきて掘り返そうと話した日のことを。

「校庭のスマイレ畑の裏の杉……」

俺たちが声を揃えて言ったのは、あの日タイムカプセルを埋めた場所。分りやすい場所にといいことで、当時の教頭先生が趣味で植えたスマイレの花壇の裏にある一本杉の根元に埋めたのだ。俺たちは早速その杉の木がある場所へ向かった。

「あつた。これだ」

校庭に出てスマイレ畑があつた場所に着くと、そこにはもうスマイレ畑はなかった。おそらく、教頭先生がやめた後に撤去してしまったのだろう。しかし、杉の木は何も変わることもなくそこに立っていた。

来る途中で借りてきた園芸用のスコップで杉の木の根元を掘ってみる。子供のころに埋めたからそこまで深くはないはずだ。

そうして少しの間掘り進めていくと、ガンツとスコップが何かにぶつかる感触があつた。俺と京子は顔を見合せて、その固い感触の辺りを掘っていく。すると、土で汚れた銀色のアルミケースが土の中から出てきた。

そのアルミケースを掘り起こして地面に置く。蓋には『タイムカプセルです。見つけたら元に戻してください』と書かれていた。俺は知らないから京子を書いておいてくれたのだろう。

「じゃあ開けるね」

「うん」

京子がアルミケースの蓋を開ける。中にはクマのぬいぐるみと紺色のハンカチ、そして手紙が二通入っていた。

「そうだ。自分への手紙と相手への贈り物を入れたんだつたな」

「そうそう、私は無難にハンカチにしたんだよね」

「俺は女子が好きそうって理由でクマのぬいぐるみにしたな。まあ、人のことが言えないくらい安直ではあるよな」

そう言いながら互いに入れたものを渡し合い、次に自分宛の手紙を見てみる。まあ、結論からすると、内容はありきたりなものだった。頑張ってるかとか将来の夢に向かって何かしているかとか、タイムカプセルに入れる手紙のお手本のよな文章だった。だが、最後の文章だけはしっかり俺らしい言葉が書いてあつた。『これを読んでることは大丈夫だと思っけど、幼馴染は大切にしろよ』

偉そうだなと、昔の自分に思いながらも心の中で呟く。ちゃんと大事にしてるよ、と。ふと隣を見たら、ほぼ同じタイムミングでこっちを見てきた京子と目が合った。

「ど、どうしたの？」

「いや、そっちこそ……って、あれ？」

「わわっ、ちょっと見ないでよー！」

京子はそう言って自分の手紙を隠す。だが、隠す前に確かに見えた。手紙の最後の方に『幼馴染を大事にね』という文章が。

「ふふふ！あつはつはつはつは！」

「ちょ、なんで笑うのー！」

京子は自分の手紙を笑われていると思っっているがそうではない。俺と京子が同じことを考えていたことに少し気恥ずかしさを覚えながらも、嬉しくて笑ってしまったのだ。

そして、それと同時にこれからもこの幼馴染を大切にしていけないといけないなと感じた。

二人の関係性がとても素敵でした。図書館で本を読む男女というお題を、懐かしい文集を読む二人に解釈したところも、意外性があつて「お、面白そうだ！」と読みながら思いました。最後はほっこりする二人のお互いの想いにも感動しました！

クリブニュース広報班

自由創作部門

『これは一般職員の日記です。』 といち

常識と言えそれまでなんだけど、非常識と言えれば非常識で、そんな曖昧模糊な私たちの世界は、しかしはつきりと二分されているのだった。唯、当然なまでに。

私は地球の断面を見つめ、今日も問題ナシと打ち込み、送信し、写真を撮る。それを「本日の業務完了です！お疲れさまでした〜」「#断面」「#第一種AG業務」「#新人社員歓迎」といった文章と共にSNSにアップする。写真にはたっぷり哀愁を込めたつもりが、コメント欄には何の表示もなく、我々がどうの昔に見捨てられていることを、そこで、遅まきながらに思い出す。

地球が半分に分れても大半の人類は困らなかつたといえれば嘘になるが、どうか嘘だが（地球は東西に分れたので）私、否、我々が半分に分れた断面がこれ以上割れないかどうかを観測し始めてからかれこれ十年ほどが経ち、はやばやとのこりの人類からの興味を失われてしまった。そういう段階なわけだ。それに加えて、故・新人が「地球がさらに四分割されようとしておる！」などと宣ったものだから我々は炎上した。炎上しました。物理的にも、電子的にも。ちなみに、そこで仕方なく公開殺人に処したので、新人は故・新人となり、今はそんな平穏を乱す不穏分子もいない。

南無……

「なむ！」

地球の断面は思っていたよりも芸術的で、たまに人の顔が浮かんでいるようにも見える。叙情的に、どっかに飛んでいってしまったもう半分の地球に置いてきたかもしれない、あなたのだれかを見るのもいいだろう。

この安全性が証明されれば、そういう噂を流布して観光スポットとするのもやぶさかではない。別れは感動的で、再開も感動的。エモーショナルな演出もおまかせあれ。

「ここは誰もいないかね」

誰もいないから。

「喪失なんて悲しまないよ」

今更。

僕にだってプライドはあって、僕が如何にここまで耐えてみせたかをここで全て開示してしまったっていいんだけど、そうは言っても、そうは言っても……それで、僕がどうにかなるってわけじゃないんだ。晴れ晴れはするかも、するかもしれない。プライドを保ち続けることに意味なんてないのかもしれない。我々は我々で、そういうことにして、今日も意味なく駄文を綴ればいいのかもしれない。

「そうだよ……」

半分に分れた地球は唐突に信号を発してきた。どうも、もう半分も何とかなっているらしいということ、どうにかくつつけられんもんかとその時はここもざわついたものだが、人類の手には負えなさ過ぎて早々にみんな引き揚げていってしまった。きみだけがここに残った。

「しばらくここにいてもいいよ」

痛々しかった。

そんなの痩せ我慢でしかなく、ここにも片方の地球には会えず、どうしたってこれは軽めの暇つぶしであって、もう一つの地球に会いに行くプロ時ジェクトの定員は満員で。

「我々、と形容しつづけるのもいい」

何ひとつよくはないのだった。

「代わりにもならないから安心して」

……

「自分だってそう」

当たり前である。

なのに、我々は我々で、私は、僕は、もう一度変容し続けて変容しないものを記録している。単調な業務にひとつも難しいところなんてない。続けることは簡単で、止めることは難しい。次は宇宙船になり、もう半分の地球の民と宇宙ステーションで邂逅を果たすプロジェクトだった。失敗した。

「技術がね」

半分だから。

次は？

「行くさ」

出会いと別れの観光スポットになるはずが、ここは自殺の名所になりかけ、私は大変苦労する羽目となった。我々は説得をなんども試みるも、しかしどうにもならず骨折り損であるということに十数回目で気付き、正直な気持ちを開示したところ、ギリギリ残っていた青木ヶ原樹海に向かってくれたため事なきを得た。

午後六時に電報を打つ。異常もなければ死者もなし。

どうにももう一つの地球は滅びかけているらしいというわさで、要は酸っぱいブドウということなのだった。我々はキツネだ。

「俺はいくよ」

一気に倍率は下がり、もはや誰でもがもう一つの地球に行けるようになったと思いきやそもそも到達不可能であろうとの見解が示され始め、きみのやる気は目に見えて死んでいつている。

SNS では徐々にいいね数が復活し始め、たまにリプライもついた。だからなんだと言う話でもなく、僕の好意に、行為に意味があるとするなら良いだろう。意味なんてなくても暇つぶしとして続けるし、写真の端にはいつも写り込んでくるし。

「写り込んでいるだけというのはさすがにどう？」

まんまとピースをしてキマった顔をする。

どうも何も……という感じだ。造花の向日葵が後ろで揺れていた。僕はというと、夏がめちゃくちゃ嫌いなので今すぐにも退けたかった。

「笑顔が向日葵みたいだね！とか言えない？」

調子に乗らせすぎたかもしれない。

「最後だけ」

最後とは限らないはずなのだけれど、僕は否定できない。もう一つの地球はとても魅力的かもしれないし、そもそも途中でシップは破綻して、みくんな宇宙の藻屑になるかもしれないから。

「またな」

手のひらくるくるってヤツだ。シンプルにムカついたのでそのまま追い出すことになった。

さようならだった。

「本日帰還決定者番号の発表ですが」
事務的な声に呼ばれて、外に出る。

果たしてヤツの番号は呼ばれるだろうか。頬を掻く。電車から降りたばかりで、まだ足元が揺れている気がする。

「大丈夫ですか？」

「はあ」

おそらく大丈夫ですと答えると、何を他人事みたいに……という顔をされる。他人事なんだから放っておいてほしい。

「きっと帰ってきますよ」

そうかな……。

「時には希望もだいじ」

「はあ……」

機械みたいな声が発されるのほとんど同時に、電光掲示板に出現する数字が増えていく。不思議なことに、瞬きひとつも惜しくなってきた。僕の生理的な反応で結果が変わるわけでもないのに。希望も何もないのに。きみはどうなの？ ねえ。



詩的な表現と独創的な世界観に惹かれました。この二つが相まって二千五百字に納められているにもかかわらず、それ以上の世界が広がっているのだらうと想像できます。この投稿されたSSは群像劇の一つでしかなく、このストーリーの続きをもっと読みたいと思われました。

クリブニュース制作班

自由創作部門 『インスタント』 烏庭愛

深夜一時三〇分、冷え切ったキッチンでインスタントのたまごスープを食べる。

フリーズドライの黄色と白と緑で構成されたマーブル模様の小さな直方体。お気に入りのマグ。頭上には不健康な蛍光灯。寶石のような青い火で、わーんと間抜けな音で鳴くステンレスの鍋に湯を沸かす。

空白。少しの間忘れていたはずの不安が。この先どうにもやっていけないような気がして、どうしようもなく逃げ出してしまいたい。何もかも投げ出してしまいたい。少しの痛みも苦しみも受けたくない。少しでも傷ついたら泣いてしまいたい。眠っている家族や友人を起こしてまで弱音を吐く気にはなれないから、夜に押し潰されそうになりながらじつと毛布にくるまっていた。しばらくするとそれも耐えられなくなってキッチンに水を飲みに行ったら、なぜかインスタントのたまごスープを食べたくなった。

ぼこぼこ、というお湯の沸いた音で意識が今に引き戻される。透明のあぶくが浮かんでは消えている。火を止めてマグにお湯を注ぐとマーブル模様の輪郭はみるみる崩れて、たまごとわかめがゆらゆらと浮かび上がった。やわらかい白い湯気が頬を撫でる。そうしてはじめて頬が冷たくなっていたことに気がついた。

インスタントのたまごスープは少し塩辛い。身体がじんわりと温まる感覚。ほっと息をつくとき、さつきよりもまともに息ができるようになった気がした。手足はまだ冷たい。静かだ。今なら眠れそうな気がする。即席の不安と安心。歯を磨きながらぼんやりしてきた頭でこんなことを考

えた。

これから先の痛みや苦しみの中でも、インスタントな安心で明日を選んでいきますように



まるで一つのCMのような、短くても心に残る作品だと思いました。
不安な時、誰かに相談できなくとも、心の安定を求める主人公の心理描写が印象的です。

クリブニュース制作班